

第23回「チーム新・湯治」セミナー [東京現地会場+オンライン配信]

日本三古泉から学ぶ温泉文化の承継と温泉地の未来

環境省では、第23回「チーム新・湯治」セミナーを令和8年7月27日に開催しました。先般、我が国の「温泉文化」は、ユネスコ無形文化遺産への登録の提案が決定され、今後国内外からの注目が一層高まり、温泉地の活性化につながることが期待されています。中でも、有馬温泉、道後温泉、白浜温泉は日本三古泉と呼ばれ、千年以上もの歴史を有する、日本を代表する温泉地です。温泉地を取り巻く環境は時代とともに大きく変化している中、時代のニーズをとらえ、その変化に対応しつつ、温泉地としての固有の文化を守り、長い時間を生き抜いてきた日本三古泉の歩みから学ぶことは、今後の温泉地活性化へのヒントを探る上で重要なものです。今回のセミナーでは、日本三古泉を切り口に、温泉地が大切に守っていくべきものは何か、そしてこれからどのような未来を描いていけるのかを、参加者の皆さまと一緒に考えました。

事例発表1 有馬温泉の過去、現在、未来・・・ 金井啓修氏（一般社団法人有馬温泉観光協会 会長）

- 有馬温泉は、活火山がないにもかかわらず100℃を超える高温の温泉が湧き、高濃度の塩分を含むなど、世界的にも非常に珍しい温泉である。こうした唯一無二の温泉資源こそが、有馬温泉最大の魅力だと考えている。また、京都や奈良など歴史的に都に近かったことから、多くの歴史上の人物が訪れ、日本有数の歴史を持つ温泉地として発展してきた。
- 地域の魅力は温泉だけではない。有馬山椒の復活や新たな特産品づくり、地質や温泉の成り立ちを分かりやすく伝えるストーリーづくりなど、有馬ならではの資源を掘り起こし、「なぜ有馬なのか」を伝えることを大切にしている。
- 1980年代から「そぞろ歩きのできる街」を目標にまちづくりを進めてきたが、当時は大型旅館の囲い込みが中心で、街なかを歩く人は少なかった。しかし、阪神淡路大震災後に実施した日帰り入浴と昼食を組み合わせた企画をきっかけに多くの人が街を回遊するようになり、飲食店や商店も増加した。震災という危機を、温泉地全体で来訪者を迎える新しいまちづくりへと転換する契機とすることができた。
- 現在は、景観条例の整備や大型宿泊施設の開業を見据えた交通対策、温泉資源の持続的な利用などを含め、新たなマスタープランの策定を進めている。地域全体で30年先を見据えた将来像を共有することが、持続可能な温泉地づくりにつながっていると考えている。
- 温泉地の価値は施設だけでなく、「何もない贅沢」を楽しめる空間にある。近年の猛暑を踏まえ、有馬本来の避暑地としての魅力を再評価し、ゆったり過ごせる空間づくりや自然を感じられる滞在環境の整備を進めている。温泉地だからこそ味わえる時間や空間を提供することが、これからの有馬温泉の価値につながっていると考えている。



そぞろ歩きのできる街が出来た！



温泉を見せる



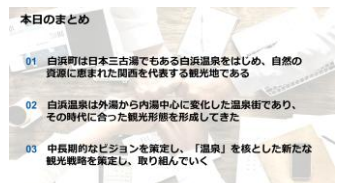
事例発表2 道後温泉が描く未来予想図 ～歴史・文化の『学び直し』から始まる新たな価値創造～ 帽子大輔氏（道後温泉旅館協同組合 理事長）

- 旅館協同組合の理事長として、まず大切にしているのは、道後温泉の「お湯」を守ることである。道後温泉では18本の源泉をブレンドし、各施設へ供給することで、効率的かつ安定した温泉利用を実現している。また、日本三古泉として受け継がれてきた歴史も大切な資源であり、地域事業者向けの歴史講座を毎年開催するなど、地域全体で歴史を学び直し、温泉文化を継承する取組を進めている。
- 道後温泉本館の保存修理工事では、地域経済への影響を考慮し、営業を継続しながら工事を進めることを選択した。工事期間中はプロジェクションマッピングやラッピングアート、著名アーティストとのコラボレーションなど、「工事中だからこそ楽しめる」取組を展開し、若年層や海外からの新たな来訪者獲得にもつながった。
- 瀬戸大橋開通後に観光客増加による混雑や渋滞を招いた反省から、「道後百年の“景”」を策定し、行政や住民、事業者などが連携したまちづくりを推進してきた。景観整備では大型看板の撤去や歩行者空間の整備、電線地中化などを進めるとともに、官民一体となった投資により温泉街全体の魅力向上を図っている。
- 現在は「道後温泉2050ビジョン」のもと、宿泊者数だけを追い求めるのではなく、地域に適した観光規模やインバウンドの受入れを見据えた持続可能な温泉地づくりを進めている。歴史ミュージアムの整備や第四の外湯の構想など、新たな地域資源の創出にも取り組んでいる。
- 今後は、DXの活用と併せて、道後温泉が持つ長い歴史を「見える化」し、まず地域の人々がその価値を理解し誇りを持つことを重視したい。その上で、神話や歴代天皇とのゆかりなど、道後ならではの歴史を国内外へ発信し、未来につながる温泉地づくりを進めていきたい。



事例発表2 白浜温泉の成り立ちとこれからのまちづくりについて 滝本 齊 氏（白浜町観光課 主任）

- 白浜町は年間約300万人が訪れる観光地であり、温泉だけでなく多彩な観光資源に恵まれている。また、羽田空港から約60分というアクセスの良さも特徴であり、首都圏からの来訪者も増加している。観光は町の基幹産業であり、地域経済を支える重要な役割も担っている。
- 白浜温泉は657年に有間皇子が湯治に訪れたことが始まりとされ、日本書紀に歴代天皇の行幸が記されるなど、日本三古泉の一つとして長い歴史を有している。白浜町では、この有間皇子を白浜温泉の名を広めた恩人として、町内に碑を設置し、毎年6月に献湯祭を開催するなど、地域の歴史や文化を大切に受け継いでいる。
- 白浜温泉はもともと「湯崎七湯」と呼ばれる外湯を中心とした湯治場として発展したが、明治から昭和にかけて大型旅館の整備が進み、内湯を備えた宿泊施設が主流となった。その後は団体旅行の時代を経て、現在は個人旅行への対応や、温泉に加えてビーチやレジャー施設など多様な観光資源を組み合わせながら、時代に合わせた観光地づくりを進めてきた。
- 現在は、夏期に観光客が集中する課題を踏まえ、「通年型観光地」への転換を目指している。宿泊割引クーポンによるデータ分析を活用したプロモーションや、秋冬のライトアップイベント、アートイベント、スポーツ大会の開催など、年間を通じて誘客できる取組を進めている。
- 近年、白浜観光の大きなシンボルであったパンダの返還を契機に、特定の観光コンテンツへの依存から脱却し、温泉そのものを核とした新たな観光戦略の策定を進めている。日本三古泉としての歴史や外湯文化を改めて見直し、温泉の魅力を「見える化」する取組や外湯を活用した回遊性向上策なども検討している。さらに、宿泊税の導入を予定しており、その財源を活用しながら、住民生活と調和した持続可能な観光地づくりを進めていきたいと考えている。



講師を交えた参加者との意見交換・質疑応答

温泉文化や歴史を次世代へ継承していくための取組

- 金井氏：毎年1月2日に有馬温泉の恩人である行基・仁西に初湯に入っていた「入初式」を約250年前から行っている。また、現在有馬温泉の歴史に関する記事を執筆し、神戸新聞に掲載している。単に史実を紹介するだけでなく、物語として伝えることで地域の魅力向上につなげていきたい。
- 帽子氏：道後温泉には、玉の石へのお参りや齋戒沐浴といった文化が残っており、温泉と信仰が結びついた文化を大切にしている。また、地域に長年住む方々への聞き取りを通じて、歴史や文化を記録として残すことの重要性を感じており、各温泉地に残る祭礼や風習を比較・整理しながら、日本の温泉文化の価値を広く発信し、ユネスコ無形文化遺産登録に向けて取り組んでいきたい。
- 滝本氏：白浜温泉では、献湯祭や温泉神社に関わる行事を、地域住民や観光客も参加できる形に変えながら継続している。昔から受け継がれてきた文化を大切にしつつ、現代のスタイルに合わせた形で次世代へつないでいくことを重視している。また、これまでの白浜温泉の歴史を絵本にまとめて子どもたちへ配布する取組を行ってきた。さらに、今年度からは高齢化が進む語り部の知識や経験を若い世代へ継承するための取組を始めている。

景観まちづくりを進める上で大切にしていること

- 金井氏：地域全体でルールを決め、温泉街らしい景観を守ることが重要である。そのためには、行政との連携だけでなく、自主財源を確保しながら地域自らが景観づくりを進める仕組みが必要になる。
- 帽子氏：まちづくりでは、地域内で十分な合意形成を図ることを最も重視しており、新たに外部から参画する事業者にも地域の理念に共感してもらうことが重要である。また、行政と意見をぶつけることも重要であり、入湯税や宿泊税に依存するだけでなく、温泉に付加価値をつけて単価を上げることで収益を生み、その収益を地域へ還元する好循環を目指している。

伝統を守りながら新しい取組を進めるために必要なこと

- 滝本氏：新しい施策には賛否があるものの、地域で十分に対話を重ねることが重要。その上で、地域を引っ張るリーダーが明確なビジョンを示し、周囲を巻き込みながら進めていくことが変化を実現する原動力になると考えている。
- 帽子氏：地域にはさまざまな立場や考え方があるため、関係者に対話する順番や進め方を丁寧に考えることが重要。地域の先人や影響力のある方々への敬意を忘れず、一人一人の意見を聞きながら合意形成を進めることがまちづくり成功の鍵である。
- 金井氏：平時は多様な意見を持っている人たちも大きな課題に直面すると自然と一つにまとまってくる。「ピンチはチャンス」という言葉のとおり、危機をきっかけに地域の結束力が高まると考えている。

アートなど新しい取組の成果と温泉地づくりで最も大切にしていること

- 帽子氏：アート事業の起点は道後温泉本館の改修という緊急対策的な事業だった。行政を主体に、地域が一体となって実施した結果、若年女性の来訪増加という成果が得られた。温泉地づくりで最も重要なのは、「地域に暮らす人が誇りを持てる場所」であることがと考えている。
- 滝本氏：コロナ禍をきっかけに始まったウォールアートは、現在ではまち歩きを楽しむコンテンツとして定着している。まちづくりには制度や仕組みだけでなく、地域への「思い」が何より大切であると考えている。
- 金井氏：有馬温泉では、路地裏を活用したアートプロジェクトなど、地域資源を生かした取組を実施してきた。これからのまちづくりは「人づくり」であり、子育て支援や地域で子どもを育てる環境づくりなど、人材への投資が温泉地の未来につながると考えている。

新・湯治の視点からそれぞれの温泉地の魅力について

- 金井氏：有馬温泉は古くから多くの人々が心身を癒やすために訪れてきた。現代においても、病気の療養だけでなく、日常生活で疲れた心と体を整える場としての価値は高いと考えている。
- 帽子氏：コロナ禍を契機に、地域の宿泊施設で温泉入浴指導員の資格取得を進め、温泉の効能を科学的な視点から伝える取組を始めた。健康づくりや適切な入浴方法を提案することも、新・湯治の重要な役割であると考えている。
- 滝本氏：白浜温泉では、企業誘致やワーケーションと温泉を組み合わせた取組を進めている。仕事をしながら十分な休養を取るといった新しい滞在スタイルは、新・湯治の可能性を広げるものとして期待している。

